

沖永良部島のシキユマ —— 初穂儀礼から死者儀礼へ ——

蛸島 直*

目 次

はじめに

I 沖永良部島のシキユマの特異性

II 住吉集落のシキユマ儀礼

(1) シキユマを行う家 (2) 契機 (3) 時期 (4) 儀礼の内容

III 他集落の事例

IV シバナの祭祀

V シキユマの本義

VI 変容とその背景

(1) 穀物生産の激減 (2) シバナ(潮花)の可塑性 (3) 防災儀礼の必要性和ユタの関与
むすび

はじめに

故北見俊夫先生は、『日本民俗事典』において「シキョマ」の項目を執筆され、これを「南島で、本格的な刈入れ直前に営まれる穂掛け行事」と定義されている¹⁾。また、先生は、1950年代の日本民俗学の成果の集大成ともいふべき『日本民俗学大系』において「奄美の民俗」の「年中行事」の執筆を担当され、そこでは、シキユマ(スクマ)についてつぎのように概観されている。

本格的な刈入れが始まる直前に、ことさらに、あらたまった気持ちで豊作の祈願と感謝をこめて抜穂の行事が営まれる。時期は六月初の子(面縄)、初の丙子(宇検村)、戊(笠利村)の日とか、アンダネから二八日目(徳之島母間)というような決め方や、刈入れの一週間前(竜郷村)といった具合で一様でないが、ほとんど六月中に行われ、稲作の年中行事の重要な折り目である。南島ではスクマといっている。行事の性格上鎌入れの行事といってもよく、初穂を本柱や高倉に掛けるところから、穂掛け行事といってもよい。

(中略) この行事の共通点は、よくできた穂を数本とってきて先祖に供え、次に本柱にかける。高倉があった時代にはもちろん倉の内にも掛けてまつり、毎年上へ重ねて掛けたものである。その日の夕食に新穂の数粒を必ず混ぜて、簡単な御馳走を家内で食べる²⁾。

*愛知学院大学文学部助教授

このように、シキユマ儀礼の本質が、「穂掛け儀礼」あるいは「初穂儀礼」と呼ぶべき農耕儀礼であることは間違いないものと考えられ、また『日本民俗事典』の「穂掛け」の項目には「収穫祭」、「刈上げ」と並んで「シキョマ」が「参照すべき関連項目」とされていることから、この儀礼の農耕儀礼としての重要性、あるいは資料としての重要性が窺われる。

ところが、沖永良部島におけるシキユマ儀礼（東部諸集落ではシチュマ、ミーシチュマなどと呼ばれる）は他の島のシキユマ儀礼とは趣を大きく異にしている。この点について、北見先生は逸はやく留意されており、先の『民俗学大系』の引用の中略部分には、「ただ、沖永良部島では他の島と同じようにシチュマというところはあるが、穂掛けをする行事は伝承されていない」と但し書きされているのであった³⁾。

筆者は、先生が研究代表となった文部省科学研究費補助金による調査研究に参加の機会を与えられ、1981年から沖永良部島での調査を開始した⁴⁾。その後、聞き取り調査において、沖永良部島のシキユマ儀礼が、先生のご指摘の通り「穂掛け」の要素を見いだせないことを再確認すると同時に「農耕儀礼」としての要素が希薄であり、別個の性格をもつ儀礼であるかの印象をもつようになった。その性格というのは、「死者儀礼」、より正確には「異常死者に対する儀礼」ということである。

以下、沖永良部島におけるシキユマ儀礼について、先学の研究成果に加え、筆者が調査で得た資料を提示し、その特異性の由来について考えてみたい。いわば例外的性格をもつシキユマ儀礼について考えてみるわけである。

I 沖永良部島のシキユマの特異性

沖永良部島のシキユマの特異性に関しては、その後もいくつかの指摘がなされている。小野重朗氏は、奄美群島全域と沖縄本島における多数のシキユマの事例の比較を行っているが、沖永良部島のシキユマについて、知名町赤嶺と和泊町根折の2例を挙げ、「刈り上げ後に、その新米で飯をたき、それを竈神や祖神などに供え、また食べる形をとって、稲穂を迎える儀礼が欠けている点」を指摘し「特異な形をもつ」ものとしている⁵⁾。

下野敏見氏は、南西諸島各地のシキユマの事例を詳細に調査され、「沖永良部島の民俗行事」と題する論文（1972年）において、沖永良部島のシチュマについて6事例を記述し、その特徴の一つとして、次に引用する一例にみられるように、「不慮の事故で死んだ人の霊」すなわち「シバナ」にも供物を供えることに注目し、本来の趣旨からの逸脱を指摘している。

国頭では、「ミシチューマ祭り」といってウリズム（湿り気のある旧四月の頃の意）のフー（大麦）の初を四月の丙丁のどちらか一日供える。すなわち重箱二つに麦と米の飯のにぎりと肴を入れ、水をそえて縁から外に向けて供える。この時「ウリズムのフーの初を上げます。シバナに上げますから、海の神様受取って、竜宮の神様に受渡してウヤホーに上げて下さい」と唱える。そして門口で、粉を少しまく。旧六月丙丁にも、米と粟を混ぜて炊いたニギリを供え、同

様に唱える、これはシバナに初を上げる意味だとも、またニレーヤの神に上げるのだともいう⁹⁾。

また、鹿児島県教育委員会が1980年に実施した調査ではつぎのように報告されている。

沖永良部島のシキユマは稲に限らず麦、アワなども行い、麦は旧4月ごろ、稲は6～7月のころ、アワは7～8月のころで、日は決っていない。初穂の穂掛けをするという伝承はあまりなく、刈り始めの米や麦を用いて新しい飯を炊き、それを椀に山盛りにして、膳に米、酒、ワラ束をのせ、縁側に供えて海の方、ニラヤの神、シバナ（潮花）に供え、また、カマドや位牌棚にも供え、皆で食べる。新米を親せきや米をとらぬ人に贈るという伝承もある⁷⁾。

また、畠山 篤氏は、1979年から80年にかけて行われた調査において、「ミシチュマ」、「ミシキユマ」という語彙を採集し、「島外（海や内地など）で死亡した者の霊を慰める祭りである」と定義し、また、「シチュマ」については、「仏壇やヤチクチに新米（ミイグミ）で作った御飯を上げ、家内で祝った。この日は久しぶりに白米を食べられるので、みんな心待ちにしていたという。また、他所より早く収穫したら、親類や隣人にも白米三升贈っている」⁸⁾と記述している。

親類や隣人への分配という、これまた特異な要素が見いだされるのである。

このように多面的な沖永良部島のシキユマ儀礼であるが、南山大学文化人類学研究会村落調査サークルによれば、知名町正名集落の調査に基づき、①シンセキや隣近所に対してのもの、②祖先に対してのもの、③ユタの関与するものの3通りに分類するという。それぞれの概要を要約・引用してみよう。

①については、「以前、正名では米作が行われていたが、米を作ることのできるのは限られた家であった。そこで、米を作っている家では精米を終えると、作業を手伝ってくれた隣近所や分家、婚出した娘やシンセキのところなどへ『ハチ シーブラ』といって米を配った。この米のやりとりと、その米を指してシキマといった」という。

②については、「収穫が完了した後ではなく、刈り取りを始めたその日に収穫物を初物として上げるものであった。米をはじめムギ、アワ、マーミ（大豆）、ターニウム（田芋）などの初物のとれる折々に、『シキマ カミラシュンド』といい、収穫を感謝し翌年の豊作を祈願してシンソダナに供えた。米なら炊いて茶碗に盛り、麦は団子にするなどして『トゥキドゥキ ノ モンジクイ ノ ハチムヌ アギム』（折々の作物の初物をあげます）『シキマ オイシム』（シキマをあげます）『ウヤホ マジニ オイシリ』（ウヤホも一緒に召し上がれ）などといって供えたという。この日の晩は、家内でも初物で祝の料理を用意し、婚出した娘夫婦や分家の人を招いたり、招き返されたりした」という。

③の「ユタの関与するシキマ」については、こう記述されている：「これは今でも僅かに行われているものだが、現在についていえば、限られた特定の家の慣行と考えるべきであろう。初物

がとれると家の人の干支に合う日を選んでユタを呼び、祖先に関わる占いをしてもらおうというものである。これを『ユタにシキマをあげてもらおう』などという。ユタの指示に従って御飯や皿物を並べた膳を三つ用意し、ティーシに南向きに並べる。その前で占いなどが行われるが、ユタは『初物を供えてもらっておじいさんもおばあさんも喜んでいる』というようなことを明かすという。この時、家にさわりのあるところはないかみてもらったりもした。その後、歓談しながらお茶を飲み、『ウヤホーと一緒に御飯を食べる』ということでユタを交えて食事をする。ユタにシキマをあげてもらおうのは、初物の収穫毎ではなく、何か不幸があった後だけという人もある。ユタがシキマをあげるのは『ウヤホーのためだ』というが、同時に海難死者や自殺者を『慰めることにもなる』といわれている⁹⁾。

こうした3分類の②については、他の島々のシキユマ儀礼に一部共通する部分を認めうるが、①と③については、初穂儀礼とは呼びえない内容である。以上のように、複数の調査結果が、沖永良部島のシキユマ儀礼の特異性を指摘しているのである。

II 住吉集落のシキユマ儀礼

筆者は1981年から84年にかけて沖永良部島西部の住吉集落を中心に断続的な調査を行い、また94年と96年に補充的調査を行った。その際に得たシキユマに関する資料を提示してみよう。まず、もっとも注目したいのは、シキユマを実施する（した）家が全戸ではなく、一部の家に限られるという点である。以下、シキユマを実施する家の性格、契機、時期、儀礼の内容について、シキユマを実施している2人のインフォーマントを中心に彼らの語りのスタイルをなるべく生かす形で記述したい。

(1) シキユマを行う家

①シキユマとはどこの家でも実施するわけではない。家族、親族に、タビ（島外）で死んだり、畑など外で急死したり、首を吊った者など、家で死ねなかった者のいる家で行う。そのカミサマ（死霊）が飛んで歩くから、こうした者はハデイ（風）になって飛んで歩くので、そうした者上げるのである。

[奥山ウトさん（女性、1897年生まれ） 1983年11月談]

②シキユマをするのは、家人や先祖が海や山で死んだことのある家のみである。海や山で死んだ人のマブイ（靈魂）に上げる。こうした人々は事故で死んでいるので、家で病气して死んだウヤホー（祖先）とは一緒ではないので、盆の代わりにする。また、墓にマブイタマシイが行っていない。骨は墓にもって行っても死んだウヤホーと一緒にではない。だから、センソ（先祖棚）※では拝まない。普通の祖先は33年まで拝むが、海山で亡くなった人は、子孫のいる限り祀り続ける。

[奥義隆さん（男性、1908年生まれ）、1982年9月談。※先祖棚は本土の仏壇に相当するもので、住居の東に据え付けられ位牌が配置される。異常死者の位牌もここに同様に収めら

れる。]

③野原で死んだテイシバナ、海で死んだウキシバナは、死んだジイサン、バアサンたちと一緒にじゃないからね。風になって歩くといって。夏と春にその人のためにご飯を上げる。そういう人はウチで養ってない（死後の世話・供養をしていない）からね。オヤ（祖先）と一緒にじゃないっていうわけ。その人の食べるもの用意して別にマツリをする。

[奥義隆さん（男性，1908年生まれ），1984年8月談]

(2) 契機

このようにシキユマの実施は不慮の死を遂げた死者のいる家に限られるというのが、複数のインフォーマントの一致した回答であった。さらにこの儀礼を開始するに当たっての契機として、病気や夢見といった神秘的な体験を挙げることができる。

④ハデイがさわって、その時、ユタの指示があると、それからシキユマを始める。その家の者であっても、親戚であっても、その家のものを食べたいというカミサマ（死霊）がさわったら、ユタの指示でシキユマを始める。

[奥山ウトさん（女性，1897年生まれ） 1983年11月談]

ここでは、ハデイによるサワリ（ムンドウイなどと呼ばれる）が、家ごとのシキユマの開始の契機となることが示され、またユタの関与についても触れられている。

(3) 時期

⑤シキユマを行うのは、年2回で、旧2～3月ころのウリジユム（麦の収穫期）と旧7～8月の米の季節（ナツノシキユマ）の2回だった。昔は麦が宝だった。2度のシキユマはどちらも、乙（キノト）・甲（キノエ）・癸（ミズノト）・壬（ミズノエ）のうちいずれかの日を選んで行った。「キーミズがいっしょ」といって、この4つの日のいずれかにした。しかし、家族のエトの日は必ず避ける。つまり、キーミズで家人のエトと重ならない日を選んだ。もしも家族のエトの日に拝むと生きてる人が死んだ人と一緒になってしまう。昔は正月に加え、旧2、3月と7、8月のシキユマのころは、モノシリ（ユタ）が忙しかった。とくに旧2、3月は冬と夏の境で、風が変わる頃。皆が風邪を引く頃で、医者もなかったのでモノシリは忙しかった。

[奥義隆さん（男性，1908年生まれ），1982年8月談]

⑥麦の刈り取り後に1回、米に新しい麦を混ぜて炊く。米の刈り取り後に1回、新しい米を炊く。だが、実際は米の刈り取り後の年1回ということが多い。家族のエトの日は避ける。新米は先祖棚にも上げるが、これはシキユマより先で、全戸で行う。

[奥山ウトさん (女性, 1897年生まれ) 1983年11月談]

⑦我家 (⑤のインフォーマントの家) では年に2, 3回シキユマをしている。夢見るたびにする。白いご飯を食べる夢を見せる。そういうときにはシキユマをする。オジイサン, オバアサンが来て稲の刈り取り, 粟の刈り取りなど夢を見せる。シバナになっている当人ではなく, 自分の父や母が来る。シバナになっている人たちに上げてくれと言葉をいう代わりに夢を見せる。これはオヤと一緒にない人が, シキユマを欲しいということ。こないだも我家でシキユマをした。今年 (1984年), 自分に, 両親が稲の刈り取りの夢を見せたのでシキユマをしようということになった (9で後述するようにインフォーマントの両親はともにユタであり, 以前は自家のシキユマ儀礼を行っていた)。旧暦の7月5日にハギマ (縁側) でシキユマした。豆腐, 卵などにご飯をハギマに供えた。昔だったらユタにしてもらったが, 自分でした。年寄りはこのことがあると, いつでも自分で上げる。今はユタが少ないが, 昔はたいていユタにお願いした。

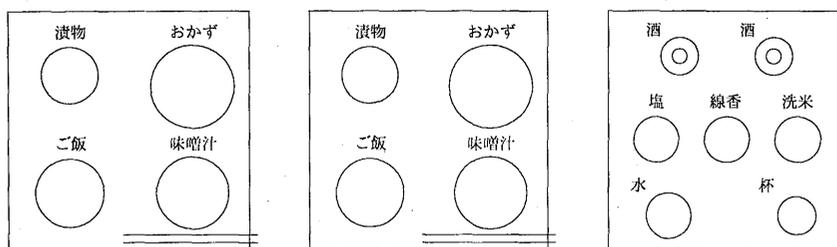
[奥義隆さん (男性, 1908年生まれ), 1984年8月談]

⑤は春秋の麦と米の刈り取り期に対応するものであるが, ⑥にみる, 実際には年1度が多いというのは, 儀礼がやや等閑視された様を示しているようである。また, ⑤と⑥を照らし合わせると, かつて宝とされていた麦よりも, 米が重視されるようになったという移行が読み取れよう。⑤と⑦は同一のインフォーマントの語りであるが, 本来は年に2度実施すべきことを知りながら, ⑦では, 規則的な年中行事というよりも, 夢見によって怠慢が指摘・自覚され, 実施が促されるといった形態が示されている。

(4) 儀礼の内容

⑧シキユマは普通はユタを頼んで実施するが, 我家では, やり方がわかっているのでユタを呼ばずに家人のみで行う。ハギマ (縁側) に, 3つの膳を据えるが, 内2膳は, 茶碗に盛った炊きたての温かいご飯, 味噌汁, おかず (豆腐, 肉, 野菜の煮物), 漬物の「四つ組み」である。もう1つの膳には, 酒をカンビン (銚子) に2本, 杯, 塩, 洗米, 水, 線香を供えた。これらを外側に客人がいるかのように配し, 箸も外側に添える。「メーグミノハチオイシラ」(新米のお初を召し上がれ) と唱えたが, 麦に関しては, 表現がなく, 何もいわずに供える。

[図1] シキユマ、デノオガミの供物の配置



[奥山ウトさん (女性, 1897年生まれ), 1983年11月談]

⑨ハギマ (母屋の縁側) に、ご飯、おつゆ、おかず (鶏肉、豚肉、鶏卵、豆腐)、塩、米、酒を供えて、家の中から外に向かって拝む。拝んでから供え物を外に向かって「食べてくれ」といって投げる。なお、ご飯については、春のシキユマは本来は麦飯だったと聞いている。昔は麦が宝だった。しかし、ユタに持たせるのでユタが喜ぶよう、春 (麦) のシキユマも米のご飯を炊くようになった。自分が子供のころにはすでに春も米のご飯だった。

自分はユタであった親とともに他家のシキユマを見る機会もあったが、拝む場所は、拝む人、ユタによって異なった。ハギマではなくオモテ (座敷) で拝む場合もあった。我家では昔からハギマで拝んでいた。いずれの場合も最後には供物をみな「食べてくれ」といって外へ投げた。我家では、自分の父、母、父の母の3名がユタだったので自家のシキユマのトゥート (祈祷) をしていた。その際、「われはここのうちの人に頼まれてする。何も知らんから」といって拝んでいた。シキユマの際の呪文はヤクバライの呪文である。自分は父が唱えていた呪文を記憶している。つぎのようにハギマに供えた塩、米、酒それぞれの「元をただして」(由来を説いて) から拝む。

・塩 「ミオリノオリ、イチオリノオリ、ナナオリノオリ、オリテキチャノナニシタツチャノ、ニガマシヨハラマシヨ、シタツチャノモノオバスエテ、ウガデオイシラ」

(波が三度降り、一度降り、七度降り、地面に降りてきた苦く辛い塩を据えて拝んでお供えします)

・米 「ニガツサンガツ、ワービヌミズ、オイシャコゲラチ、シャーノアブラミチャツチ、ヒゲミグラチャヌターネツクタヌ、シラヨシノマシワグミ、セーナメテ、ウガデオイシラ」

(2月、3月の若い水を汲んできて、おいしく掻き交ぜ、下の油の入った土をまた掻き交ぜて種を作ったこの米、白い綺麗な真の米を盛り、拝んでお供えします)

・酒 「ニガツサンガツ、ツクタノコメデ、イエーウナイ、タンドウテイ、ホウジシーツクチャ

ヌ、アオモリ、オオモリ、セーナメテ、ウガデオイシラ]

(2月、3月に作った米で、家の中で、桶で発酵させて麴を作った泡盛り大盛りの酒を供え、拜んでお供えします)

そうして、シバナに対して、「テイシバナ、ナッティヌチュー、ウキシバナヌチュー、ヒワ(ネー)ノトウシヌ、ハチガツノユッカヒナッティ、シキユマオイシャムンドォー、オイシタボレ」(テイシバナ(野原で死んだ人)になっている人、ウキシバナ(海で死んだ人)になっている人、今は、(子)の年の8月の良き日なので、シキユマをお上げしますよ。召し上がって下さい)と、2、3回唱える。耳の遠い人もいるので1回では足りず、2、3回繰り返すのだという。

[奥義隆さん(男性、1908年生まれ)、1982年3月、9月、1984年8月の3回にわたり、前回の聞き取り内容を確認しながら聞き取った。]

⑩シキユマにはユタを招き、初米、粟で御馳走をこしらえ「シキユマオイシリ」(シキユマを召し上がれ)とウヤホーガナシ(先祖棚)に供えた。ご飯、肉、豆腐、野菜、ゆで卵をお膳立てした。何かにつけて昔はよくユタを使った。

[宮山植文さん(男性、1916年生まれ)、1982年7月談]

⑩我家でも先代のジイサンの弟が海で亡くなっている。7月15日にシキユマをやっていた。舟を作って食物を載せて流す。今はしない。私もやり方、正しくは知らない。海で死んだ人に、シヨール(盆)のころ、昔はバナナの長いホネ(茎)で舟を作って、舟に食物入れて沖に出す。米、塩、煮付けたおかず、食物を載せて、海の途中でひっくり返り、海のカミサマに上げる。

[叶フミさん(女性、1913年生まれ)、1994年10月談]

⑩は、ハギマではなくウヤホーガナシに供えるというものである。また、11は舟を作って海に流すという内容で、盆行事の一環として異常死者に供えるものである。瀬利覚集落においても同様な儀礼が行われているが、次章で記述することとする。なお、北見俊夫先生は、住吉で明治末ごろまで行っていた行事として「小さい舟を造り、芭蕉の茎を帆柱に、葉を帆とし、握飯を舟に乗せて海に流す行事」を「シバナトートー」として記述されている¹⁰⁾。2つの情報を見比べると、そこにシキユマとシバナトートーとの酷似あるいは後から生じたであろう混同がうかがわれるが、これについてはIV章で検討することとした。

住吉集落では、シキユマ儀礼のこうした側面に加え、南山大学文化人類学研究会の分類による「米を作らぬ家への贈与」も行われていた。新米を粳、白米、ご飯のいずれかの形で分け与える習慣である。すなわち、

⑫初上げの日（脱穀後粳俵を初めて高倉に上げる日）の夕方にムニシーイワイ（粳にした祝い）を行う。手伝った皆が集まり、夜中までお祝いするが、この後、米を作らない人に粳を配って歩くことをシキユマといった。少しずつ粳を分けても、精米所に行かなくてはいけないので、白米で上げた人もいる。新しい米がとれたら、一緒に食わせ、ハツモノを食べてもらおうという気持ちで行った。これは米の収穫に際してのみ行うことで、（麦や粟の収穫の際にはしなかったのか？という筆者の問いに対して）「麦や粟はどこの家でも作るからしなかった」という。

[宮山植文さん（男性、1916年生まれ）談、1982年7月の聞き取り内容を1994年10月に再確認のうえ補足]

⑬シキユマといって、新米を炊いて親戚とか隣に、飯椀いっぱいにもっていく。今はやらない。

[宮山植弘さん（男性、1895年生まれ）、1982年7月談]

III 他集落の事例

他集落のシキユマについては、先に触れた諸論文、諸報告においてすでに貴重な報告があり、それぞれを参照されたいが、ここで断片的なものも含め筆者が得た資料を補足提示しておきたい。

⑭シキユマ（知名町田皆）

昔はした。自殺したり、グシヨ（後生）に行けない人に上げる。シキユマは、その年の最初のお米でご飯を炊いて供えた。私の代になってからやっていない。

[インフォーマント名失念、1982年8月聞き取り]

⑮シュクマ（知名町瀬利覚）

大きな汽船ができるまでは帆前船で沖縄の王様に貢ぎ物を納めた。北風が急に吹いて、与論島のあたりでひっくりかえって亡くなった人たちのタマシイを祭るため、海岸の岩の下にご馳走や酒を供え、また新しい米を宝として祭り、ユタがトオート（祈祷）した。7、8月の夏、海が荒れるので、よく祭った。

[瀬利覚、福山長富さん（1907年生）、1994年10月10日談]

⑯シュキユマ（知名町瀬利覚）

今はやっていないが、旧7月の12日か13日だったと思う。盆の前の日に、海で亡くなった人のお祭りをした。ミチユイガマとサートウグミの2カ所の海岸に、家族を海で亡くした家の人びととその親戚が集まった。子供の頃、母親と一緒にいった記憶がある。

バシャ（芭蕉）の茎で長さ50センチほどの舟を作り、イーキドーラとご馳走、そして線香を載せる。イーキドーラとは、ハジギ（オオハマボウ）あるいはバシャの葉でトーラ（俵）を模して麦を包んだものと、粳と粟を混ぜて包んだものの2つを作る。麦は麦だけで炊けるので麦のみを

包むが、粟は米と一緒に炊く習慣なので粉と混ぜて包んだ。ユタを呼んでノリトを上げてもらい、海に入り、舟を歩ける所まで持っていき流す。これをシキユマを上げるという。舟を流してから集まった者が酒と肴で飲食した。

[瀬利覚出身、小米在住、永野ヨネ（1908年生）、1996年9月10日談]

なお、瀬利覚におけるシキユマについては、同集落在住の宗岡里吉氏が、著書『知名町瀬利覚に伝わる昔ばなし』に「シクマー祭り」の項目を設けている。詳細な記述があるので、引用してみよう。

大正十年（1921）頃まであった行事の1つで海で死亡された人々の御霊に対し、今年とれた米や麦、粟、及び果物や野菜等の初穂を供える祭りであります。

該当する家では毎年旧暦の7月14日、午後4時頃からミチュイガマの周辺でこのシクマー祭りをします。

まず、バショウの葉の中央部の茎を5本ぐらい準備し竹のクシでこの茎を差し通し、舟の型を作ります。そして真中には帆柱を立て帆を上手に張ります。このような模型舟を該当者の家では各自で別々に作るのです。そしてこの模型舟の中に五穀、野菜、果物等の初穂を積みまた酒や飯及び料理の品々を供えます。

線香を焚いていよいよ出発の準備ができますとあらかじめお願いしてきてもらった神様（ユタ）にのりと（祈り言葉）を唱えていただきます。

そして最後に両手で恭しくこの舟を押して御霊の国へと出発させます。みんなが懐かしげに見送る中に舟は沖へ沖へ波にゆられて行きます。その海辺の浜でシクマー舟を送り出した後祝いをします。家から持参した一重一瓶の膳を開いて小宴の酒盛りをします。

神様は、次から次へと五、六か所を回ってのりとを唱えてシクマー舟を送り出します。

このような行事を毎年旧暦の7月14日に催しておりましたが、いつの間にか消えてしまいました¹⁴⁾。

さらに宗岡氏は、註において、シクマーについて、「新しいお米がとれますと、近所、親類、恩人等へ、シクマー（祝米）として配ります。この言葉と同一だと思われます」と付記している。この儀礼の語源が「祝米」という意味にあるとは考えがたいが、儀礼の当事者たる著者がこの文字を当てていることには注目すべきであろう。現在の意識がその文字に投影されていると考えられるからである。

⑭ ミーシチュマ（和泊町国頭）

国頭ではミーシチュマと呼んでいる。ミーシチュマの「ミー」は「新しい」の意味。ミーサのもの（新しい物）を上げる。生きてる者だけが食べてはいけない。島外で亡くなった人のために

は特別にオハツを上げる。私の夫も、ブーゲンビリアで戦死し、夫の弟も戦死している。米と粟のとき、2回お初を上げる。ミーシチュマは夕方行方。ウヤフジは3回とも朝だが、ミーシチュマはウミリと同じく夕方である。ウミリも特別に亡くなった人の家で行う行事で、ウミリをする家とミーシチュマをする家は同じだと思う。米、粟、麦のそれぞれのお初をお重に詰めて上げる。

おかずと握り飯、洗米と線香を供える。昔は、大きなハラ（平らな筈）にご馳走を並べて出かけ、フクギの葉に供え物を載せた。以前は、浜にも行ったし、集落の南の入り口にある表忠碑（忠魂碑）の建っている広場で行っていた。ここからは北にも南にも海が見える。7、8軒が集まった。北の海で亡くなった人に対しては北に向かい、南の海で亡くなった人には南に向かって拝む。ほとんど主婦が行方。家ではこうこうだと家庭の状況を説明して、来年の豊作を願う。普通の祖先には、毎日、朝晩お供えするが、島外で亡くなった人には、このようにしてお供えする。

供え物を並べ、年長の代表者がつぎのようにトオート（祈捧）して、みな手を叩いて、ご馳走をいただく。「ナマムール、アツマタントウ、〇〇ヌヤーム、……〇〇ヌヤーム、ムールアツマタントウニ、ウハツオイシャブラーヤ、マタヤニム、ハンシモンツクイ、デキラチタボーリ、ムールガ、ウハツオイシタバシヨリヨ、トオートトオート」(みな集まりました。[集まった家の屋号を列挙し] みんな集まりましたから、お初を召し上がれ、また来年もこんなに作物が出来るようにして下さい。みんなお初を召し上がって下さい)。

それから、お重に詰めたご馳走をみなで交換して酒を飲み、和やかに過ごした。

最近ミーシチュマは各家で行うようになったが、オモテ（座敷）に、ご飯、汁、酒、おかずを載せた3つの膳と、洗米、花、線香、蠟燭を供えて祈り、3つの膳から供え物を少しずつ取って屋敷の東に土産として置く。後で、猫や何かが食べるのかも知れないが、これを済ませると嬉しくってほっとする。

ジイサン、バアサンがやっていた行事は続けなくてはいけない。今、若い人達は関心がないようだが、我家では、「外国で亡くなったジイサンたちにおハツ上げようね」と孫たちに話してミーシチュマを行っている。供え物については、「これを食べると身体も丈夫になって勉強もできるようになる」と孫に話して聞かせている。孫たちも「オジイチャン、いただきます」といってから供え物を食べている。

[国頭、名島アイさん（1913年生）、1994年8月、1996年9月談]

なお、国頭においては、シキユマ（ミーシチュマ）とウミリ行事に類似した性格が認められるようである。畠山 篤氏もこの点に留意し、ウミリの性格は判然とせず、「海で遭難して死亡した者の霊を祭るともいう。すると、5月と7月のミシチュマと同一の祭りということになる。ここには何らかの混同があるようである」と指摘している¹²⁰。

IV シバナの祭祀

以上の記述から、沖永良部島のシキユマ儀礼がいくつかの側面をもつものの、その祭祀対象と

してのシバナ（異常死者）の比重の大きいことが理解できる。ここで、この島におけるシバナのイメージを再検討してみよう。

沖永良部島では家の中で亡くなった者と、家の外で亡くなった者とが截然と区別されている。家の外で亡くなった者、とくに事故や海上で亡くなった者は、そのマブイ（靈魂）が現場や海上に残り、こうした死者を出した家では、ユタを依頼しその靈魂を回収し墓地へ導くことが期待されている。山下欣一氏によれば、海上で事故死して死体の上がらない場合には、ユタが、後述する「シバナシゴ」という呪詞を唱え、死霊のたたりを鎮めるといい¹³⁾、「豚一頭か鶏を海に投げ入れるものであったという。知名町ではこのような儀礼は昭和の初年まで行っていたという（小米）」¹⁴⁾。それでもなお、こうした家々では、特殊な儀礼を継続する必要がある、年中行事としてのシキユマを実施したのである。通常の死者と同様に位牌を設け、先祖棚に祀られはするが、祭祀の方法と機会は厳格に別たれていた。

先に触れたように、海上で死んだ者をウキシバナ、陸上で死んだ者をテイシバナ（ケイシバナ）と呼ぶが、一般にシバナと呼べば、前者、すなわち海上で死んだ者を指すものようである。沖永良部島和泊町在住の研究者 甲 東哲 氏によれば、「陸から海に突き出た岩礁の突端」をシバナと呼び、ここには「水死者の霊であるシバナ神が宿るといふ」¹⁵⁾。筆者は、同様な説明を知名町小米において聞き取っているが、その霊の名称をシュバナヌハミ（シバナの神）とも呼ぶという [小米、瀧川元正さん（1912年生）、1981年1月談]。

ウキシバナは、しばしば流木に宿るものともいわれ、そうした流木を拾ったことを後でユタに指摘されることもある。柏 常秋氏は、「往時は、一般に寄物にはシバナ（潮花）の神が憑りついて、これを祭らないと、ひどく祟るとの信仰があったといわれているが、最近に至るまで、高価な寄物を拾った者及びその子孫は、九・十月の頃に祈祷師を招き、シバナトート（潮花祈祷）と称する祭典を海岸で行うことが残っていた」と記録している¹⁶⁾。ここでは、シバナに「潮花」の文字を当てているが、それが地形名ともなっていることを考えると、その語義も納得できそうである。山下欣一氏は、喜界島のユタの成巫過程を論じる中で、その中核としての「シュバナ、ミズバナを取る儀礼」に注目している。ミズバナを取るとは「泉で水神を拝み水をかぶる儀礼」であるが、シュバナを取るとは「海岸で波の打ち寄せてくる白波の部分をススキで『七汐 七波七花』と唱えてすくうようにして体にかぶる儀礼」である¹⁷⁾。他島の例ではあるが、シバナ、シュバナの語源が「潮花」にあることを示唆するものであろう。

ところで、国頭出身の先田光演氏は、ユタからの聞き取りによって、ユタの唱える呪詞を収録・翻訳している。「ウワフガミ」（豚拝み）という病氣治療の呪詞には「ていーしばな しんだましなむん」、「うきしばな しんだましなむん」というフレーズが登場するが、これに氏は、「嶽シバナ 死魂な者」、「沖シバナ 死魂な者」の文字を当てている¹⁸⁾。また、「シバナシゴ」というもう1つの呪詞には、シバナの由来が語られている。すなわち、「大潮と八重潮とが白浜の真中に打ち寄せて、生んだ子に、名前も附けず、根島も与えず、生れ子は名前が欲しくて、白浜の真中に、寄り草をかぶっていた」が、それに手足を触れた「マスダチヌマオトコ」なる者が溺死

してしまった。その親は狂気してユタに祈願させたところ、「大潮と八重潮が生んだ子」が「名前を下され、根島を下され」と要求したので、「ウキシバナタビシバナ」という名前が与えられた。名前とともに、住む島が与えられ、食物として「難破船があるならばその荷物はお前のものになせよ」と語られるのである¹⁹⁾。ここで由来の説かれたシバナとは、潮の子供であり、死霊とはイメージを異にするものである。シバナは、難破船以前に存在しており、その乗船者とは別個の存在であることもわかる。一方のウワフガミにおいては死霊そのものが語られており、2つの呪詞の間に小さな矛盾が認められることになる。先田氏はこの点に留意されながら、下手々知名におけるシバナトートゥについて、「海で死んだ人の死霊を和らげるため、海の神－死霊の支配神を祭る」と述べ、ここではシバナについて、死霊そのものではなく「死霊の支配神」というとらえ方を示している²⁰⁾。

なお、北見俊夫先生は、奄美諸島全体を視野に入れ、「シユバナ（潮花）は海の神とも考えられており、奄美諸島一般に、潮の満ち引きと関係の深い月を祭る行事として、シバナトートーといわれ、地域により若干の変差はあるものの、全般的に正・五・九月の十五夜に、モト家（本家）で月祭りが営まれる」と記している²¹⁾。シバナのイメージは、このように多面的である。これが、沖永良部島のシキユマ儀礼の変容や錯綜に連なるであろうことは後に再考することとしよう。

沖永良部島では、ウキシバナもテイシバナもともにハデイ（風）になって飛び歩き、人や家畜に災いするとされている。ハデイが当たることをムンドオイといい、ムンドオイした者は、頭痛や悪寒、震え、腹痛などを訴える。住吉では、ムンドオイが軽症であればアーノオシと呼ばれる治療儀礼が行われた。これは、患者の衣服にユタが呪文を唱えて息を吹きかけるものである。これで回復しない場合は、ムンドオイした死者が誰であるかが特定される。それは、ほぼきまって患者の祖先や親族の霊であり、祭祀を求めてムンドオイしたものと解釈される。こうした時、ユタの指示によりヂノオガミと呼ばれる儀礼が行われる。住吉におけるヂノオガミの内容はつぎのようなものである。

ムンドオイやシバナがすぎるなどのサワリのあったときにヂノオガミをする。この儀礼は、シキユマが通常午後に行われるのに対し、午前中に行われるが、その内容はシキユマと酷似している。ハギマ（縁側）に、3つの膳を据えるが、内2膳は、茶碗に盛った炊きたての温かいご飯、味噌汁、おかず（豆腐、肉、野菜の煮物）、漬物の四つ組み。もう1つの膳には、酒をカンビン（銚子）に2本、杯、塩、水、線香、さらに場合によって洗米。これらを外側に向けて配し、箸も外側に添える。ただヂノオガミには通常洗米を供えないが、ユタによっては洗米を供えるので、この場合はシキユマとまったく同じになる〔図1参照〕。もっとも、ヂノオガミはサワリがあるといつでも行い、時期が不定であるので、初物を供えるわけではない。この点がシキユマ儀礼との大きな違いであろう。ユタは、3つの膳の内側に座ってトオートし、トオートの後、供物は下げて食べる。

〔主として、奥山ウトさん（女性、1897年生まれ）からの聞き取り（1983年11月）に基づく〕

ヂノオガミは、下野敏見氏らの記述する他集落における「シバナ祭り」、「シバナトウトウ」（シバナ祈り）に相当するものようである。下野氏によれば、

シバナ祭りは、普通は、牛馬の病気などの折、ユタの託宣でシバナの祟りであるというわけで、祭りを実修するものである。したがって時期は一定していない。(中略) 竿頭ではシバナがかかっている時は、ユタが大豆を煎って庭に撒いてシバナを追い払う。喜美留ではシバナ祭りは、酒肴を縁から外庭に向けて供え、ユタが祈祷をし、さらに酒肴を門口に持って行って祈ってシバナを追い払う。上手々知名では、シバナはグシヨに行けないから「天の庭」にやらしてくれとシバナトウトウ（シバナ祈り）するのだという。

ともかくシバナは災をもたらす不幸の霊であり、ごちそうを与えて追い払わなければならないのである。そしてこれにはユタが関与しているのである²³⁾。

なお、シバナトウトウはこうした臨時の儀礼であるとは限らない。北見俊夫先生は、奄美諸島一般に全般的に正・五・九月の十五夜に営まれると指摘されていた²³⁾。甲 東哲氏も、沖永良部島のシバナトウトウについて「海で死んだ人の霊を慰めるための祈祷。稲の初穂をシバナに供えて遺族が祈祷した。国頭字ではテンシバナとも言い、年二回シバナに御馳走を供えて祈り、家族もそこで食事した。麦は五月の節句までに、粟や米はお盆までにシバナに供える。また水も供える。略式には縁側とする²⁴⁾と説明している。定期的年中行事的な性格をもつもので、この島のシキユマ儀礼と境界を設けがたい内容である。さらに、下野敏見氏は下手々知名の例を挙げ、「旧二月から六月にかけて麦、粟、米の新穀をそれぞれ縁側に供えて拝むが、これをシキユマといわずシバナ祭りという」²⁵⁾と記している。また、柏 常秋氏の記す先の「シバナトート」は、時期が9、10月に限定されるようであるが、基本的にはヂノオガミと趣旨を同じくする儀礼のようである。

いずれにせよ、以上のようにヂノオガミやシバナ祭り、シバナトウトウなどの内容はシキユマ儀礼のそれと酷似しており、甲氏の記述においては、両儀礼の一体化が認められた。また、山下欣一氏は「一般にシバナをユタが祭るのをシバナトートと総称している」²⁶⁾と指摘しているから、シキユマ儀礼も広義でのシバナトートに含まれるという見方も可能であろう。沖永良部島のシキユマ儀礼は、その解釈だけを異常死者のための儀礼と改めたのではなく、内容もまさに、初穂儀礼からはほど遠く変形していることが確認できよう。

ところで、シバナは、自分の家でシキユマが行われている限り、家族に災いすることは少ないという。すなわち、シキユマ儀礼の中断が、ムンドオイによる病気などの災いを引き起こすとされ、ユタの診断によって、その対処儀礼としてのヂノオガミやシバナトウトウが実施されるのである。こうした点で、シキユマ儀礼を潜在的な防災儀礼と呼ぶこともできよう。また、II章一⑦のように、夢見による祖先の要求を契機としてシキユマ儀礼を実施するというのは、臨時の行事と化しつつある様相を示すもので、ここにも両儀礼の連続性がうかがわれるのである。

V シキュマの本義

ここでシキュマの本義について再考しておこう。まず、「シキュマ」の語源についてであるが、先に宗岡宗吉氏が、シキュマに「祝米」の字を当てていることに触れたが、下野敏見氏も、慎重な態度を示しながら徳之島各地における「施給米」「始給米」などの民間解釈を紹介している²⁷⁾。また、北見俊夫先生は、奄美大島と徳之島の年中行事を概観したうえで、「語義語源についてはここで定め難いが南島のスクマとも関係があろう」²⁸⁾と示唆し、田畑英勝氏もこれを受け、「おそらくスクマのスクは糯米に対してウルチをサクというのと同じく、稲(穀類)のことであり、マは穂の意であろう」²⁹⁾と推測し、下野氏もこれを支持している³⁰⁾。また、甲東哲氏も、シチュマを「初収穫の米または麦。特にそれを祖霊に供えたり、他への贈物とした場合にシチュマと称する」と記している³¹⁾。

沖永良部島で愛唱される民謡の1つに稲摺節(イニシリブシ)がある。筆者が小米集落においてシキュマについて聞き取りをしていた際、シキュマ儀礼の内容を知らない若いインフォーマントが、稲摺節の歌詞に「シキュマ」が登場することを指摘してくれた。『知名町誌』にはその歌詞がつぎのように記載されている。

きばし うない ちや しきゆめ
気張て摺りよ 姉妹ぬ達 支給米 かみらしゆんど (ハヤシ) サァ 稲摺り摺りよ 穀選
り選りよ
なんごく ふみ し ひな
何石ぬ 米む 摺てど 減らしゆる (ハヤシ) サァ 稲しりしりよ 穀ゆりゆりよ
米ぬ 選らりゆみ 殻ど ゆらりゆる (ハヤシ) サァ 稲しりしりよ 穀ゆりゆりよ
ことし ゆが ふみ で き
今年 豊年どし 米や 粟ぬ 出来たんど (ハヤシ) サァ 稲しりしりよ 穀ゆりゆり
よ³²⁾

件のインフォーマントによれば、シキュマとは「お初を上げる」の意味だというのが、それを誰に上げるのか、その対象は明確ではない。Ⅲ章-⑯のシキュマ儀礼の内容を教えてくれた永野ヨネさんにそれを問うと、「海で死んだ人に舟に載せて上げる」のだという。まさに先のシキュマ儀礼のことを、この歌詞が表現しているのだという。しかしながら、稲摺の際の労働歌である稲摺節は、歌詞の内容も穀物の実りを祝福することに比重を置いており、シバナ云々についてはいっさい触れていない。この歌におけるシキュマの本来の意味は、「初収穫の米」であり、それを供える対象は、近年のシキュマ儀礼のように限定されていなかったものと推測される。とはいえ、当事者の解釈には十二分に注意しなくてはならない。沖永良部島のシキュマは民謡をめぐる解釈のうえでも、本義から大きく逸脱しているようである。

VI 変容とその背景

以上述べてきたように、沖永良部島のシキュマは、その儀礼の内容や解釈、その背景となる意識においても、特殊な変容を示しているといえる。こうした沖永良部島のシキュマ儀礼について、

小野重朗氏は、「稲穂を迎える儀礼が欠けている」ことから、初穂儀礼の必要条件を欠き、「初穂儀礼より収穫儀礼へという変遷がおこった」と指摘していた³⁹⁾。それが、さらに異常死者に対する祭祀であるかのように変容しているのである。ここで整理するならば、沖永良部島のシキユマ儀礼の変容過程はつぎのようになろう。

初穂儀礼 → 収穫儀礼 → 異常死者への分配儀礼

このように、いわば3つの段階を区分しうが、移行の前半部ですでに注目されるのは、この島のシキユマ儀礼が他の島のように稲主体ではなく、むしろ麦を重視し、粟についても実施されていた点である。そして、シキユマの収穫儀礼化は、小野重朗氏が指摘するように、ひとり沖永良部島だけではなく、沖縄本島をはじめ他地域にも認められるものである³⁹⁾。それらは、祖先全体への感謝・分配を伴うが、新穀の収穫を感謝し祖先に分配するという要素や傾向は、北見先生が「農耕儀礼を通して常に祖霊が考えられていることは、わが国に一般的なこと」³⁹⁾と指摘しているように不自然な変容ではないものと考えられる。

沖永良部島に限っての理由を見いださなくてはならないのは、移行の後半部分であろう。いかにして農耕儀礼が異常死者を対象とする儀礼へと変化したのであろうか。まずは、農耕儀礼としての意味の消失の要因を考えなくてはならない。

(1) 穀物生産の激減

沖永良部島のシキユマ儀礼は農耕儀礼としての意味を急速に消失している。こうした移行を促した要因として、この島における穀物生産の激減に伴う農耕儀礼全般の衰退や縮小が指摘できよう。沖永良部島においては、サトウキビ生産に加え、明治末から百合根が栽培され、大正期には換金作物として重要な位置を占めるようになる³⁹⁾。さらに、戦後、適地適作の政策に従い、雑穀類の姿が消え、水稻も転作の奨励に伴い、花卉（フリージアなどの切花）、輸送野菜、タバコに取ってかわられ、昭和50年前後に稲作は実質的に消滅するのである³⁹⁾。

このようなドラスティックな転換について、和泊町西原集落を中心に調査を実施した松原治郎氏は、「商品生産農業への移行は、(昭和)30年代以降の日本農業において一般的にみられるところではあるが、自給的性格を完全に解消する形でそれが進行したところに、この地域の特殊性がみられる」と指摘し、その主たる要因を「もともとこの地域における自給の主体が甘藷であり、水利条件などによって稲作を拡大することが困難であったこと」に求めている³⁹⁾。ここで、沖永良部島がもともと稲作に不適であったことを考慮するならば、稲の初穂儀礼あるいは収穫儀礼としてのシキユマ儀礼を根付かせる基盤がもともと貧弱であったということになり、また、この島のシキユマが、稲よりも麦を重視していたこともうなづけよう。

さて、農耕儀礼の開催の意義が失われたのであるから、シキユマ儀礼自体が消滅してもよいはずだが、何故、この儀礼は姿を変えながらも残存したのであろうか。そして何故、異常死者を対

象とする儀礼へと変化したのだろうか？ また、異常死者の祭祀や供養が必要ならば、その機会とすべき年中行事はほかにもありうるのに、何故、これがシキユマ儀礼と結びついたのであろうか。その接点となりそうなのが、海とシバナのイメージである。

(2) シバナ（潮花）の可塑性

ここで海とシバナの性格について再考してみよう。前章で触れておくべきだったかも知れないが、すでに1937年に沖永良部島で調査を行った野間吉夫氏は先の「シバナトート」について刮目すべき記述を行っている。野間氏は農耕儀礼として「シバナトート（汐花を拝む）」をとらえているが、「新しく穀物が出来るのは稲（イネキ）に汐花（シバナ）といふ神様が宿るので、新穂をとり入れる前後の夕方、火を焚いて海に向かってお祝をする」³⁹⁾と記述している。このコンテキストにおけるシバナは稲を实らせる神格である。

これで、沖永良部島におけるシバナに関する3相の観念が出揃ったことになる。1つは、多くのインフォーマントが意識する「異常死者の死霊そのもの」であり、つぎに先田氏がユタの呪詞に読み取った「海の神にして死霊の支配神」⁴⁰⁾であり、そして第3に野間氏の記述にうかがえる「稲を实らせる神」である〔表1〕。

〔表1〕 沖永良部島におけるシバナ観念の3相

- a) 異常死者の死霊そのもの
- b) 海の神にして死霊の支配神
- c) 稲を实らせる神

シバナという語がプラス・マイナス両面の意味をもつということになり、その性質上の距離は小さくはない。a) と c) を結べば、異常死者の死霊が稲を实らせるということになるが、こうした伝承事例がいったい他にあるだろうか？ 野間氏の記述するシバナは異常死者の霊とはとらえがたいものである。筆者はここにシバナ観念の可塑性、すなわち転換の可能性を想定する。そして、シキユマは本来農耕儀礼であったのだから、c) の「稲を实らせる神」こそが原型であったと推測すべきであろう。

c) から a) あるいは b) への転換について考えてみよう。下野敏見氏は沖永良部島のシキユマの事例を列挙の後、これを総括する中で、国頭の「ミシチューマ祭り」の事例（「1章」に引用）に「海の神様、竜宮の神様、ウヤホーに上げる趣旨を述べている」ことについて、「これが本来の姿であろう。徳之島でも、海辺から初穂をネーラ（ネリヤ）に向けて供え拝むのである」と述べ、「シバナ慰めの意に解しているが、本来はシキユマにおけるニレーヤの神への感謝を示すものであろう」⁴¹⁾と推測している。

それではネーラ、ニレーヤの神とは沖永良部島においていかなる神格としてとらえられているのだろうか。国頭集落在住で、ふだん記運動で著書を著された西村サキ氏は著書『沖永良部島島民生活誌』において「国頭部落に於ける昔の農耕儀礼」を記録している。そこにはシキユマに

関する記述はないが、昭和元年（1926年）頃に著者が祖母に同行して体験した播種祝い（ファンダネイーエー）について詳細な記述がある。播種祝いに際して、海岸の波打ち際から潮水と砂を取ってくるのであるが、その理由についての、著者の祖母（1858年生）の話をつぎのように要約している。

遙か東方の海の底には「ネイリヤー」という島（聖地）があって、そこには大変に崇高な神様方がおられるが、その神様方は私達百姓の作る農作物（ムンツックイ）の見守りをなさる神様方で、毎年、新しい年が巡り来て、春節ともなれば、田畑に五穀（米、麦、粟、豆類）の播種期になると、百姓達はこうして海に来て、ネイリヤーの神様方の現世への御来臨を仰いで、それぞれの家にお伴し、五穀豊饒のお祈りをする⁴²⁾。

西村氏によれば、こうしたネイリヤーの神々が「百姓達の農作物のお見守りの任務が無事終えて、海の底の聖地に御帰りなさる時にお見送りする神事」が「ウミリ祭り」だという。こうしたネイリヤーの神々のイメージに、野間氏の記述する、穀物を実らせる神としての「汐花」（シバナ）の性格⁴³⁾に連続する面を見いだしえないだろうか。なお、ここで注意しておきたいのは、この島における「神」（ハミ）が、godやdeityの類いをも指すが、一般には、「死者」あるいは「死霊」を指しているということである。

さて、a)とb)の間の転換は比較的容易に生じたと考える。IV章で、先田氏の指摘するユタの呪詞の矛盾に触れた。矛盾がいかんが生じたのか、その理由については推測しがたいが、矛盾する2つの呪詞が繰り返し語られ、また、繰り返し耳にするうちに、人びとの間で、一方の死霊のイメージに混同・収斂されていったという可能性もあろう。こうした収斂を促したのは、後述する死霊への恐怖の念であったと考えられる。

いずれにせよ、作物に実りをもたらすネイリヤーの神、あるいは野間氏の記述するシバナと、今日シバナと呼ばれる異常死者の霊ないしはその支配神は、いずれも海に存する神格という点では共通しているのである。そうした背景のもとに、両者あるいは3者の混同とシキユマ儀礼の大きな変容が生じたものと考えられよう。海という空間を共有する神格としてこれらの混同を許す素地がすでに成立していたのである。I章に引用した国頭における「シバナに上げますから、海の神様受取って、竜宮の神様に受渡してウヤホーに上げて下さい」⁴⁴⁾といった呪文にみる錯綜は、こうした複数あるいは複数相の神格の混同・混乱の過程を示す典型であろう。

(3) 防災儀礼の必要性和ユタの関与

つぎに、異常死者が収穫時期に祭祀されなければならない理由を説明しなくてはならないが、これについては、畠山 篤氏が「精霊祭に先立ち、不運な死に方をした者の供養がまず求められたもの」⁴⁵⁾という見解を示している。さらに、下野敏見氏は「シバナに新穀を施すことは、あたかも本土の盆行事において施餓鬼棚を設けて無縁仏を供養するのと同じ思想」であると、沖永

良部島の盆行事に水棚などが無いことについても、こうしたシキユマ儀礼の内容から、その必要のなかったことがわかると述べている⁴⁶⁾。

住吉のインフォーマントは「普通の祖先は33年まで拝むが、海山で亡くなった人は子孫のいる限り祀りつづける」(Ⅱ章-②)と語っていた。祖先一般の祭祀よりも異状死者の祭祀がある面で重視されているといってもよいだろう。すなわち、本来、初穂儀礼であったシキユマ儀礼が、祖先への感謝と分配を伴う収穫儀礼へと移行したが、農耕儀礼としての意義の消失とともに祖先への感謝の念も次第に減少したが、災いする可能性の高いとされるシバナについては、その祭祀の中断がためられたのであろう⁴⁷⁾。こうして、海の向こうに想定されていた神格についての誤解が生じたものと考えられよう。

なお、こうしたプロセスはつぎのように換言できよう。すなわち、シキユマ儀礼とシバナトオートの両儀礼が互いに歩み寄ったということである。定期的年中行事であるはずのシキユマ儀礼が臨時に開催される例(Ⅱ章-⑦)については先に触れたし、治療儀礼あるいは防災儀礼として位置づけられるシバナトオートが年中行事化している傾向についても4章で指摘した。さらに両儀礼は内容面でも一体化しているのである。

さらに、儀礼を指導するユタの関与もシキユマの変容を加速させたものと考えられる。ユタは沖永良部島の伝統医療の中核に位置づけられるが、呪医と呼ぶべきユタの役割には変化が認められる。近代医療の普及に伴い、ユタによる治療儀礼の中でも一過性の病気を対象とする単純な呪法による治療儀礼が衰退する一方、ユタのムヌアーシ(卜占による神秘的病因の診断)が強調される傾向が認められ、かつ、ユタの実数が減少するとともに、少数のユタのフルタイム化、職業化という傾向が指摘できるのである⁴⁸⁾。換言すれば、ユタの行動のひとつひとつが重々しくなってきたのである。シキユマ儀礼もまた、ユタの関与により、素朴な農耕儀礼から防災儀礼へと変容したものと考えられる。住吉集落の春のシキユマは、麦飯を供えるのが以前の姿だったが、「ユタに持たせるのでユタが喜ぶように、麦のシキユマも米のご飯を炊くようになった」というインフォーマントの説明(Ⅱ-⑨)は、この儀礼の変容の過程を理解する手掛かりとなる。

むすび

以上、沖永良部島のシキユマ儀礼について、その特異な形態について記述し、変容の過程と背景について考察してきた。初穂儀礼から収穫儀礼、さらに異常死者への分配儀礼へと転じたわけだが、その背景として、穀物生産の激減により農耕儀礼実施の必要がなくなり、一方で防災儀礼の必要を説くユタの関与が、この儀礼の変容を加速させたものと考えられる。この過程においては、穀物を実らせる神から異常死者の死霊へというシバナ観念の転換が生じたが、これについては、いずれも海に存するという共通項があり、これがシバナ観念の転換を許し、シキユマ儀礼の変容を促したものと考えられるのである。

なお、Ⅲ章で、国頭集落におけるウミリ行事が、シキユマ行事に類する性格をもち、さらに両者の混同も認められることに触れたが、北見俊夫先生は、沖永良部島のウミリ祭に関して、「邪

霊接待の性格が強くうかがわれ、それは島民のもっとも怖れているシュバナ（潮花）の神を祭る儀礼がいつしか添加されるにいたったものではあるまいか」と推測されている⁴⁹。国頭におけるウミリ行事もまた、シキユマと同様な変容の道筋をたどっている可能性もあるように考えられる。

沖永良部島の農耕儀礼については、同一の伝承地において行事の内容が実に大きく転換した様を認めることができた。本稿の作業を通じ、各地の民俗の比較考察や民俗の祖形の探求には十二分に慎重な態度を示さなくてはならないことを再認識させられたが、その慎重な態度とは、つねに几帳面な姿勢で調査に臨まれた故北見俊夫先生が何よりも大切にされていたことのように考える。

注

- 1) 北見俊夫 1972:305
- 2) 北見俊夫 1959:28-29
- 3) 北見俊夫 1959:28-29
- 4) 1980,81年の調査は文部省科学研究費補助金総合A（研究代表者：北見俊夫教授）、1989年の調査は、同奨励A（研究代表者：蛸島 直）の助成によるものである。
- 5) 小野重朗 1982（1976）：258-259
- 6) 下野敏見 1981（1972）：378
- 7) 鹿児島県教育委員会 1981：64
- 8) 畠山 篤 1981：81
- 9) 南山大学文化人類学研究会村落調査サークル 1990：33-34。なお、「年中行事」の執筆者は戸塚和伸、牧野美佐緒、吉田世津子の3氏。
- 10) 北見俊夫 1989：311
- 11) 宗岡里吉 1983：70-71
- 12) 畠山 篤 1981：83
- 13) 山下欣一 1979：316
- 14) 山下欣一 1977：252
- 15) 甲 東哲 1987：90
- 16) 柏 常秋 1954：91
- 17) 山下欣一 1977：185-186
- 18) 先田光演 1989：68
- 19) 先田光演 1989：80-91
- 20) 先田光演 1989：91-92
- 21) 北見俊夫 1989：310-311
- 22) 下野敏見 1981（1972）：380

- 23) 北見俊夫 1989 : 310-311
- 24) 甲 東哲 1987 : 90
- 25) 下野敏見 1981 (1972) : 380
- 26) 山下欣一 1979 : 316
- 27) 下野敏見 1981 (1970) : 340
- 28) 北見俊夫 1959a : 111
- 29) 田畑英勝 1976 : 178
- 30) 下野敏見 1981 (1972) : 381
- 31) 甲 東哲 1987 : 88
- 32) 知名町誌編纂委員会 1982 : 1080
- 33) 小野重朗 1982 : 258-259。なお、小野重朗氏は、本来のシキョマ儀礼に認められるのは、「稲そのものを神とする最も基層的な神観念とすることができよう」と指摘している（小野重朗 1982 : 255）。
- 34) 小野重朗氏 1982 : 248-265
- 35) 北見俊夫 1959b : 30
- 36) 沖永良部島の経済や人びとの意識における百合の重要性は、この島の代表的な民謡「永良部百合の花」に象徴される。
- 37) 知名町誌編纂委員会 1982 : 16-23
- 38) 松原治郎 1981 : 138
- 39) 野間吉夫 1942 : 175
- 40) 先田光演 1989 : 91
- 41) 下野敏見 1981 (1972) : 380
- 42) 西村サキ 1989 : 79
- 43) 野間吉夫 1942 : 175
- 44) 下野敏見 1981 (1972) : 378
- 45) 島山 篤 1981 : 82
- 46) 下野敏見 1981 (1972) : 380-381
- 47) 同様な過程（要素）は、与論島の「正月ニゲー」と「精霊ニゲー」の2行事の成立にも認められるようである。小野重朗氏によれば、「これを行うのは先祖の中に、海難事故などで海で亡くなった人（潮につかまったままで、真水で死体が洗われなかった人という表現がされる）、遺体がなく墓にお骨のない人、他郷で客死した人などのような異常な死に方をした人のあった家で、これも何代も経て、もうその記憶のうすれている例が多い」という。この儀礼の本質について、小野氏はつぎのように解釈している。すなわち、「これらの死霊は暈の上での普通の死に方をしたものに比べて、死の穢れが濃く、その故に悪霊的な性格が強く、崇りの恐ろしい死霊と考えられて」おり、賑やかな盆、正月には祖先の霊たちも招かれて集

まってくるなかで、「異常な死を遂げた先祖の霊は、その死穢のために恐れられて招かれない。しかし、この異常死の先祖の霊にも現世の正月、盆に対して強い執着があり、招かれることを望んでいる。招かれなければ祟る恐れもある。この異常死の先祖の霊を恐れながら正月や盆に招き祀るのが、与論島の正月ニゲー、精霊ニゲーであると言えよう」との解釈であるが（小野重朗 1982（1972）：350-351）、沖永良部島のシキユマ儀礼の変容の背景にも同様な意識があったものと考えられる。

- 48) 蛸島 直 1984：127
49) 北見俊夫 1989：311-312

文 献

- 大塚民俗学会編 1972 『日本民俗事典』 弘文堂
小野重朗 1972 「穂掛け」 大塚民俗学会編『日本民俗事典』 弘文堂
小野重朗 1977 『神々の原郷－南島の基層文化－』
小野重朗 1982 『奄美民俗文化の研究』 法政大学出版局
鹿児島県教育委員会 1981 『奄美群島の民俗1（徳之島・沖永良部島）』 鹿児島県教育委員会
会
北見俊夫 1959a 「奄美大島の年中行事」『人類科学』XI
北見俊夫 1959b 「奄美 年中行事」『日本民俗学大系』第12巻 平凡社
北見俊夫 1972 「シキョマ」 大塚民俗学会編『日本民俗事典』 弘文堂
北見俊夫 1989（1982）「奄美諸島の海と人生」『日本海島文化の研究』 法政大学出版局
甲 東哲 1987 『島のことば 沖永良部島』 三笠出版 鹿児島市
柏 常秋 1954 『沖永良部島民俗誌』 凌霄文庫刊行会 大阪市
先田光演 1989 『沖永良部島のユタ』 海風社 大阪市
下野敏見 1981 『南西諸島の民俗2』 法政大学出版局
蛸島 直 1984 「奄美一村落の病気観－沖永良部島S部落の場合－」 『民族学研究』49巻2号
田畑英勝 1976 『奄美の民俗』 法政大学出版局
知名町誌編纂委員会 1982 『知名町誌』 知名町役場
南山大学文化人類学研究会村落調査サークル 1990 『沖永良部島の祖先崇拜と社会－知名町正名地区調査報告書－』

- 西村サキ 1989 『沖永良部島 島民生活誌—ドリネ地帯の稲作—』 ふだん記全国グループ
 野間吉夫 1942 『シマの生活誌』三元社
 島山 篤 1981 「沖永良部島の年中行事」 沖縄国際大学南島文化研究所 『沖永良部島調査報告書』
 松原治郎 1981 「自給農業から換金農業への転換と村落構造—和泊町西原—」 松原治郎, 戸谷 修, 蓮見音彦編著 『奄美農村の構造と変動』 御茶ノ水書房
 宗岡里吉 1983 『知名町瀬利覚に伝わる昔ばなし』 南日本新聞開発センター 鹿児島市
 山下欣一 1977 『奄美のシャーマニズム』 弘文堂
 山下欣一 1979 『奄美説話の研究』 法政大学出版局

新刊紹介

山下欣一著

『南島説話生成の研究 — ユタ・英雄・祭儀 — 』

著者は『奄美のシャーマニズム』(1977), 『奄美説話の研究』(1979)と立て続けに、故郷である奄美諸島のフィールドワークに基づいた大著を世に問うた。その後、南島に展開した研究の軌跡を、シャーマンであるユタが関与することによってダイナミックに、ハナシ、民間説話が生成していく様相に主に焦点を当て、ハナシがシマの人々にどのように受容され、儀礼などの行動の起動力になるのかをモノグラフィックに追及したのが本書であり、著者の長年にわたる研究の集大成ともいえる。

まず、その構成を示すと、第一章 南島民間説話研究の歩み—比較研究の予察—, 第二章 奄美大島南部における説話群の生成と様態, 第三章 奄美・徳之島伊仙台地における説話群の生成と様態, 第四章 奄美・沖永良部島における「世之主」説話群の生成と様態, 第五章 奄美・与論島における「英雄」説話群の生成と様態, 第六章 沖縄・北中城村「喜舎場子」説話群の生成と様態, 第七章 「死」をめぐる説話群

—南島を視座にして—, 第八章 祭儀をめぐる説話群—南島を視座にして—, 第九章 八重山諸島竹富島「根原金殿」説和の生成と様態, 第十章 終章 となっている。

比較研究方面では関敬吾の比較対照表『日本昔話通観』28巻の琉球・朝鮮・漢民族の民間説話対照表を基調に置きながら、琉球民間説話圏の定立、話型の文化的選択のオイコタイプの検討による南島と環中国地域との比較を提示している。

比較の指標として、日光感精説話群・ミルクとサーカ・猿の生肝・兄弟の仲直りが素材として検討される。しかし、あくまで、話される場を問題とし、言葉の呪力をユタとの関係から捉えながら立論する。民間説話を分野としての、比較民俗研究の好例が示されたと言え、方法的な角度からも問題を提起しているのである。

(佐野賢治)

B5判 594頁 索引 8頁 1998年5月刊
第一書房 8000円